

## ○ 今日のテーマ

「人間の画家・ピカソは、戦中・戦後の戦争の愚かさを直視し、どのように表現したのか。#02」 (後半)

○ 簡単にオンライン用のお名前と地域など教えてください。

○ 「ピカソ」について何にか興味・関心ありましたらお聞かせください。

# ⑤-1・(1917~1924年・36歳~43歳)「新古典主義の時代」

上流階級のきらびやかな世界は、バレエの舞台装飾や古典主義の絵画へと結実する

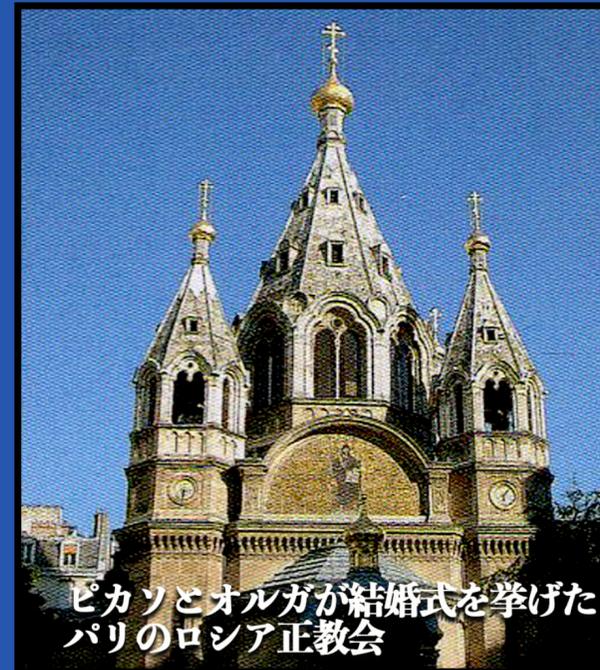
新たな時代の幕開け

## ●ピカソとこの時代の出来事

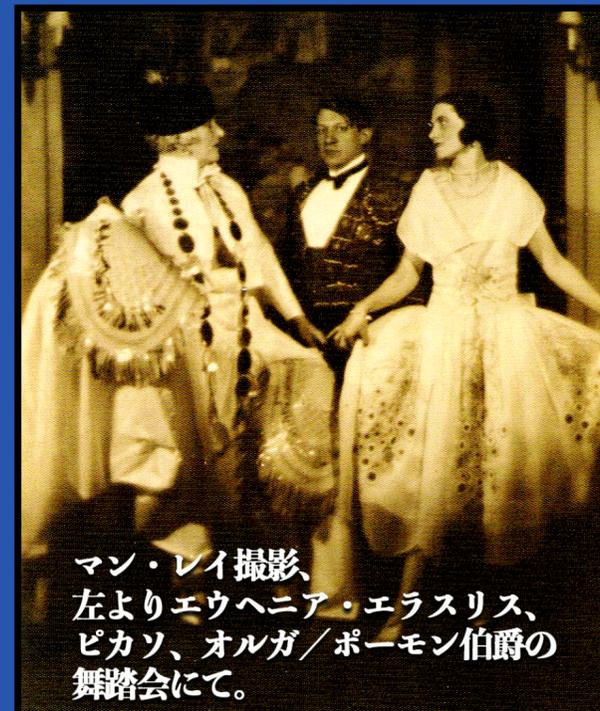
- 1917年 36歳 ◆ ローマに滞在。ロシア・バレエ団の『パレード』が上演される  
ロシアで十月革命が起こる
- 1918年 37歳 ◆ バレエ団の踊り子でロシアの将軍の娘オルガと結婚し、ボエシー街に転居する  
アポリネール死去
- 1919年 38歳 ◆ ヴェルサイユ条約調印  
ルノワール死去
- 1921年 40歳 ◆ 息子パウロ誕生
- 1924年 43歳 ◆ 『シュルレアリスム革命』誌創刊



〈水浴の女たち〉 1918年37歳



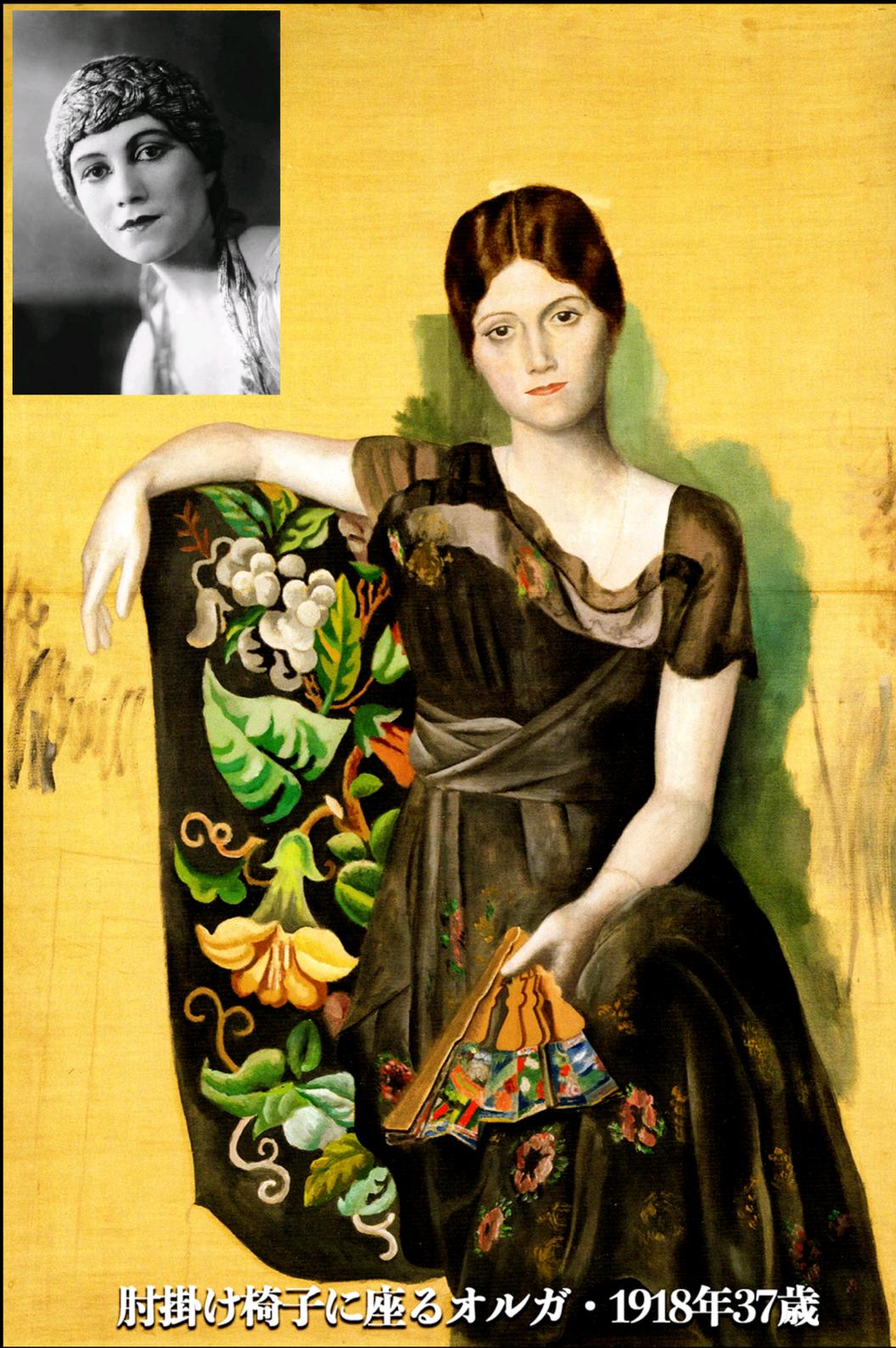
ピカソとオルガが結婚式を挙げた  
パリのロシア正教会



マン・レイ撮影、  
左よりエウヘニア・エラスリス、  
ピカソ、オルガ/ポーモン伯爵の  
舞踏会にて。

○ 第一次世界大戦中は、ピカソにも困難がふりかかる。1915年に恋人エヴァを失い、多くの友人を戦争で失った生活は孤独なものだった。しかも、生活を保証してくれていた画商カーンワイラーが敵国ドイツの国籍をもっていたため、フランスに戻る事ができず、経済的な不安にさいまわれていた。また、ピカソ刻な問題に立ち向かっていた。キュビズムによる対象の解体が単なる装飾や抽象になってしまうことを避けるため、新たな道を模索していたのである。

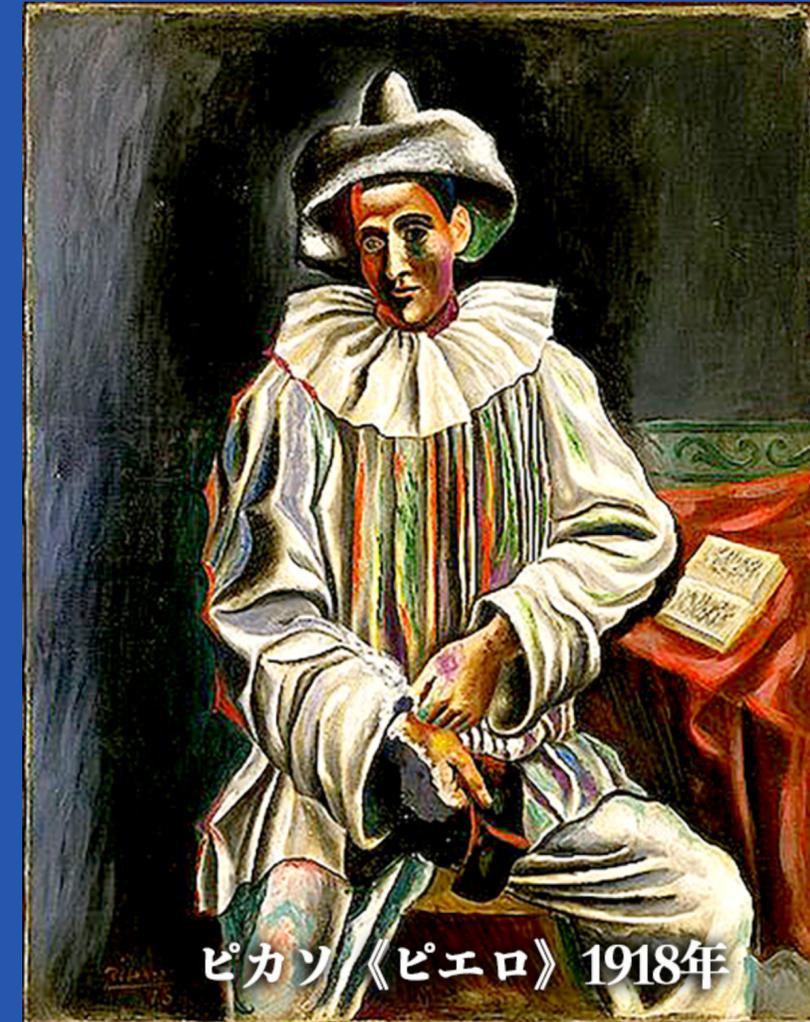
○ 〈水浴の女たち〉 1918年37歳・・・1918年7月、オルガとの結婚式を済ませたピカソは、フランス南西部の避暑地ビアリッツで10週間ほどのヴァカンスを過ごす。チリ人の富豪エウヘニア・エラスリス夫人の庇護を受けて優雅な生活を満喫した。



肘掛け椅子に座るオルガ・1918年37歳

○「新古典主義」に分類される時代の特徴を如実に示す作品である。モチーフの写実的描写は一見、陰影による肉付けという伝統的な手法を用いているように見えるが、じつと眺めていると、意外にもモチーフが平坦であることに気付かされる。実際のモデルを前にして描かれたものではなく、写真をもとに描かれたことも影響しているだろう。もとになった写真とこの作品の相違点としては、ソファやスカートの花柄やオルガが手にする扇子が鮮やかに強調されていること、オルガの頭部の理想化、そして何よりも背景の部分が手付かずのまま未完成に残されていることが挙げられる。

「写真のような」古典主義絵画



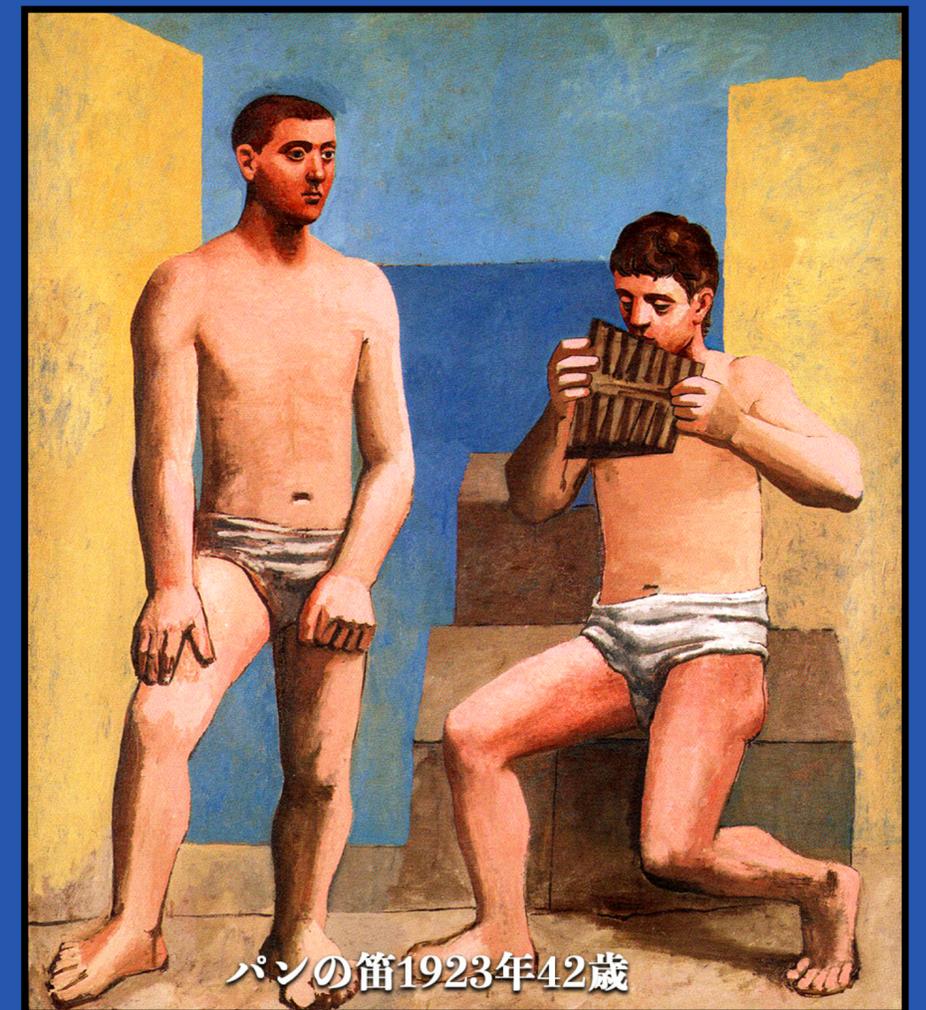
ピカソ/《ピエロ》1918年

○作品とは愛であり、理屈の良し悪しではない。問題なのは、何をするかであって、何を意図したかではない。ピカソの言葉

○1917年2月、ピカソは初めてイタリアを訪れ、ラファエロ、ミケランジェロの作品など、ルネサンス美術を数多く鑑賞した。1918年、オルガとピカソは結婚し、芸術的伝統を意識的に活用し、挑発的な表現をやめた。



海辺を駆ける二人の女1922年41歳



パンの笛1923年42歳

○海と空の青を背景に浜辺を走る2人の女性は頭を後ろにのけぞらせ、四肢を画面いっぱいに広げている。こうした体の誇張やねじれはのちに、20年代後半から30年代前半にかけて頻繁に描かれるようになるものである。2人の女性の肉付きのよさ、**とくに肥大化した手足ははちきれんばかりの生命力をたたえている**。頭部は体の大きさに**不釣り合いなほどに小さい**。背景が単純化されていることによって鑑賞者の視線が女性の身体とその動きに集中することになり、体の重さよりも**動きのダイナミズム**を感じさせる。作品は見るものに強い印象を与えるものの、実際のカンヴァスはきわめて小さい。躍動感がぎゅつと凝縮された画面なのである。

○**パンの笛1923年42歳**・・・夏、妻オルガと息子のパウロ（左頁）と滞在したアンティープ岬で描かれた大作。新古典主義時代の代表作であり、**クラシックへの別離**を告げている。厳格な純化された構成、**ギリシア彫刻のように古典的な青年像**、古代舞台プロセニウムに見立てた設定と地中海。しかし、この寂寥感はどこから来るのか。初期の構想はロマンティックな**古代神話**、マルスとヴィーナスの悲恋である。しかし、準備素描に見られた化粧するヴィーナスや弓を持つクピド（アモル）の姿は削られ、**堂々たる体のマルスと葦笛を吹くパン（牧神）の簡明で原初的な構成で終わった**。素描から油絵へ、この構想の改変の背後に何があったのだろうか。

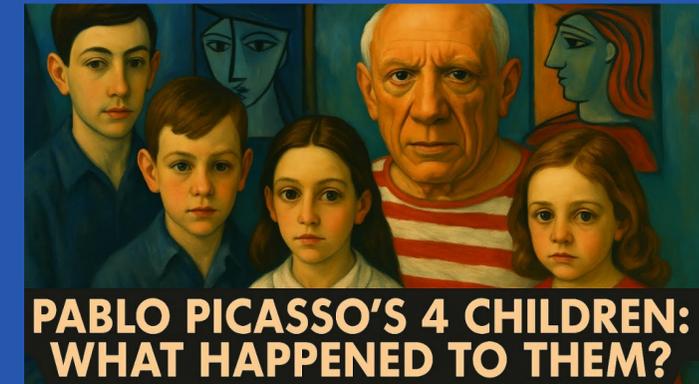
# ⑤-4・(1917~1924年・36歳~43歳)「アルルカンに扮するパウロ」



アルルカンに扮するパウロ1924年43歳



肘掛け椅子に座るオルガ・1918年37歳



○ **愛息3歳の肖像**・・・1921年2月4日、オルガとの間に初子が誕生し、ちなピカソは自身と彼の父の洗礼名に因んで**ポール・ジョゼフ**と命名、**パウロの愛称**で親しまれた。画家の分身として、その愛しみぶりが想像できよう。赤と青の菱形模様のアルルカンの衣裳で闘牛士のマタドール・ハットをかぶを被り、不安定な姿勢で椅子に腰をおろしている。椅子の形状やベージュ系の何もない背景、また未完成であるところも6年前に描いた「**オルガの肖像**」と似ており、対作品のように構想されたのではないか。

# ⑥-1・(1925~1945年・44歳~64歳)「シュルレアリスム、ゲルニカの時代」

時代の激しい葛藤と緊張が、戦争の愚かさを告発する象徴絵画を生み出す

## ●ピカソとこの時代の出来事

- |              |   |              |   |
|--------------|---|--------------|---|
| 1925年<br>44歳 | ◆ 第1回シュルレアリスム展に出品   | 1936年<br>55歳 | ◆ <b>スペイン内戦勃発</b>   |
| 1927年<br>46歳 | ◆ 17歳のマリー=テレーズと出会う<br>ファン・グリス死去   | 1937年<br>56歳 | ◆ <b>4月、ドイツによるゲルニカ爆撃</b><br>7月、パリ万博のスペイン・パビリオンで《ゲルニカ》が公開される                           |
| 1929年<br>48歳 | ◆ 友人バタイユが前衛雑誌「ドキュマン」を創刊   | 1938年<br>57歳 | ◆ 母マリア死去  |
| 1930年<br>49歳 | ◆ 《磔刑》が制作される<br>パリ北西のボアジュールに彫刻のアトリエを構える   | 1939年<br>58歳 | ◆ 画商ヴォラールが事故で急死<br><b>第二次世界大戦勃発</b><br>ニューヨーク近代美術館で「ピカソ芸術の40年」展開催<br>《ゲルニカ》がニューヨークに到着 |
| 1932年<br>51歳 | ◆ ゼルヴォスによるピカソ総作品集が出版され始める(1978年まで)<br>ジョルジュ・プティ画廊で236点の作品によるピカソ展が開かれる                         | 1940年<br>59歳 | ◆ <b>ドイツ軍がパリに侵攻</b>   |
| 1933年<br>52歳 | ◆ 美術雑誌「ミトール」が創刊され、創刊号の表紙をピカソのカラーズ《ミノタウロス》が飾る<br>フェルナンド・オリヴィエ「ピカソとその友人たち」出版<br><b>ヒトラー内閣発足</b> | 1941年        | ◆ <b>太平洋戦争勃発</b>  |
| 1934年<br>53歳 | ◆ 8月末からスペインを旅行。ピカソにとって最後のスペイン滞在となる  | 1943年        | ◆ 画学生フランソワーズ・ジローと知り合う   |
| 1935年<br>54歳 | ◆ オルガと別居<br>マリー=テレーズとの娘マヤ誕生   | 1944年        | ◆ マックス・ジャコブ、収容所で死去<br><b>8月、パリ解放</b><br>フランス共産党に入党                                    |
|              |   | 1945年        | ◆ <b>第二次世界大戦終結</b>  |

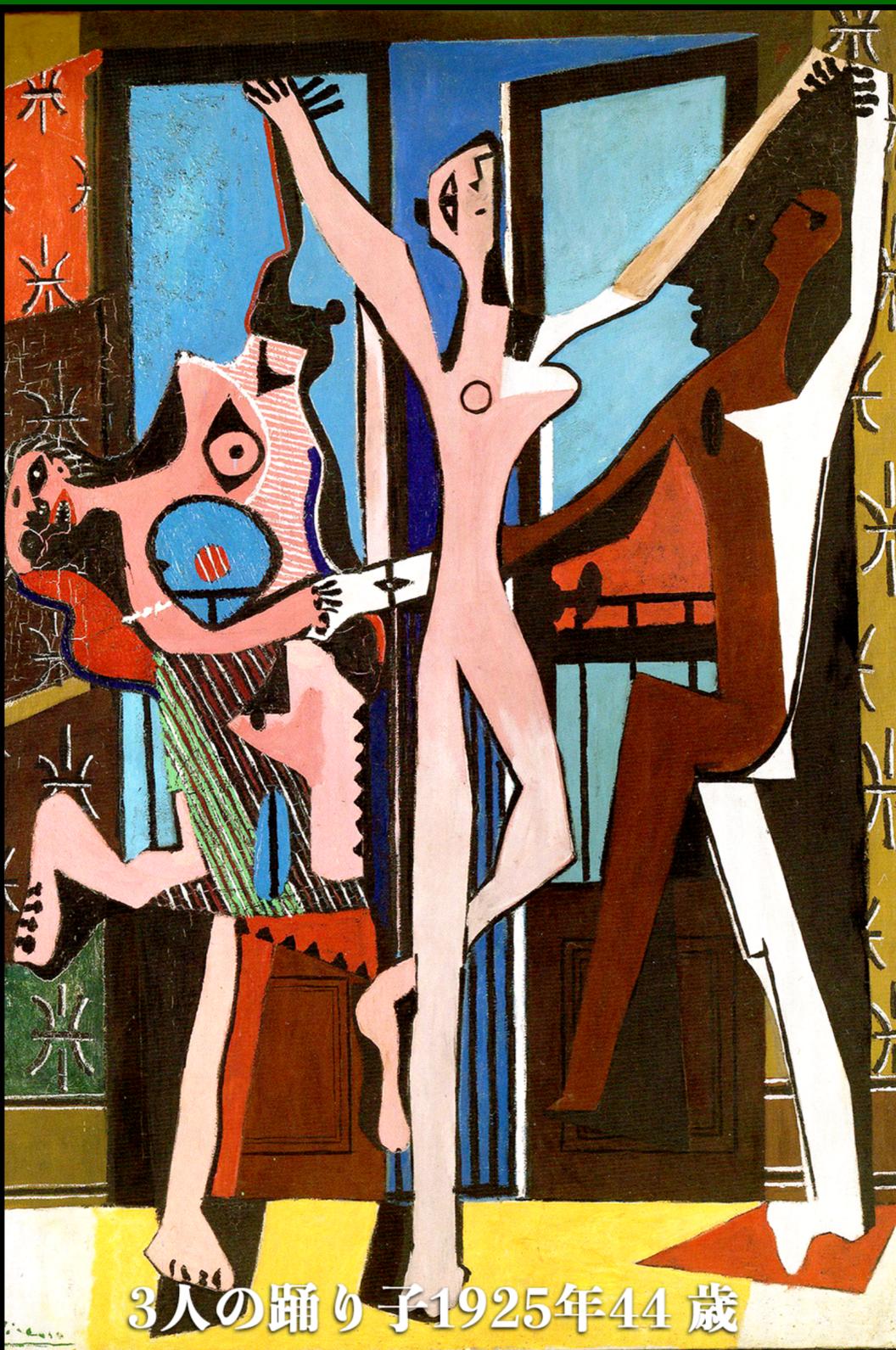


絵を描く少女の室内1935年54歳。

○「人生最悪」(絵を描く少女のいる室内)1935年54歳・・・1930年代中盤、アトリエで読書をしたり、絵を描いたりする女性の姿が繰り返し描かれ。この頃の作品では、女性が知性を備えた存在として描かれ、獣性に満ちた男性と対比させられていることに着目したい。

## ⑥-2・(1925~1945年・44歳~64歳)「3人の踊り子」

乱舞の裏側に潜む死のかけ

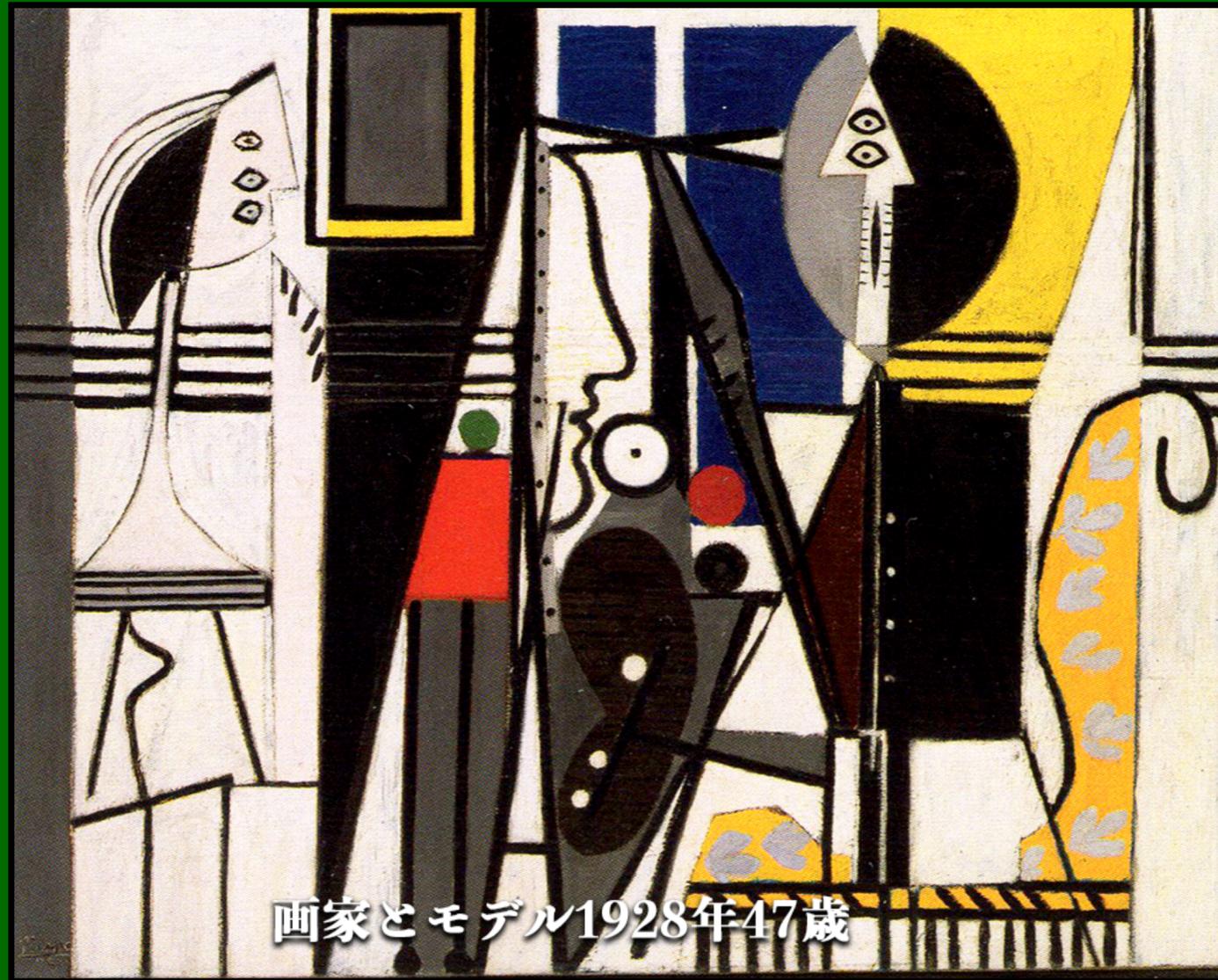


3人の踊り子1925年44歳

○1925年の春、旧友ピ  
カソットの訃報を受けたピ  
カソは、ルソーをたたえる  
晩餐会を回想しながらこの  
作品を描いたという。人間の  
体はバラバラにデフォル  
メされ、顔や手足、乳房や  
へそは記号化された表現に  
なっている。伝統的なキリ  
ストの磔刑(たっけい)像を  
踏襲しながら、原始宗教の  
儀式を思わせるような暴力  
的な表現によって、忘我(ぼ  
うが)錯乱の熱狂が表現さ  
れているのである。画面右  
手の窓に黒い横顔として描  
き込まれているピカソの  
顔は、熱狂の裏側に死の  
影が潜んでいることを暗示  
している。



○1924年、詩人アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言』を発表する。ブルジョア的な価値観を破壊することを目的とし、フロイト心理学の影響を受け、夢や想像力、無意識や狂気を擁護することによって精神の自由を主張するブルトンの思想は、シュルレアリスムと呼ばれる革命的運動の基礎となった。シュルレアリスムはブルトンに加え、ルイ・アラゴンやポール・エリュアール、アントナン・アルトーなどによって文学、とくに詩の運動として展開されるが、イヴ・タンギー、マックス・エルンスト、サルバドール・ダリ、ジュアン・ミロなど多数の画家も参加し、1920年代後半から30年代にかけて華々しい活動を展開する。



画家とモデル1928年47歳



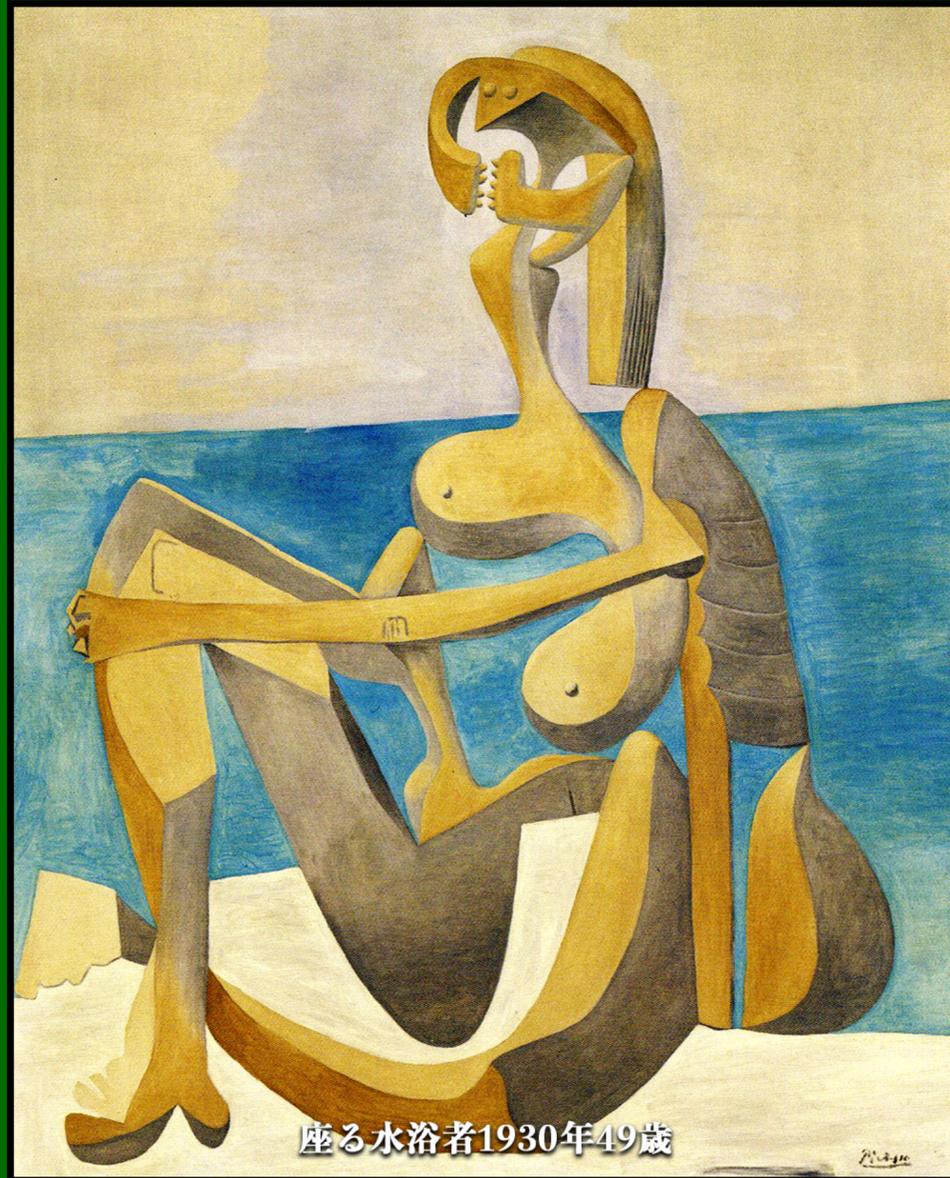
磔刑1930年49歳

○ 「画家とモデル」、あるいは「アトリエの画家」はピカソ終生のテーマとして何度も描き続けたが、なかでも本作は謎解きと神秘性を宿す傑作である。描きかけのキャンバス（画中画）を中央に、画家とモデルを右左に配した簡潔な構成だが、小色面とグリッドによる平面化した幾何学的構造のうちに様々なモチーフを巧妙に織り込んだ。そうした構造はモンドリアンやレジェによるモダニスム絵画の反響のもと、この頃彼が実践した鉄棒彫刻と1920年代の総合的キュビズムを統合した成果である。同時に、表現とは何か、絵を描く現実の行為への問いかけをこそ見るべきだろう。

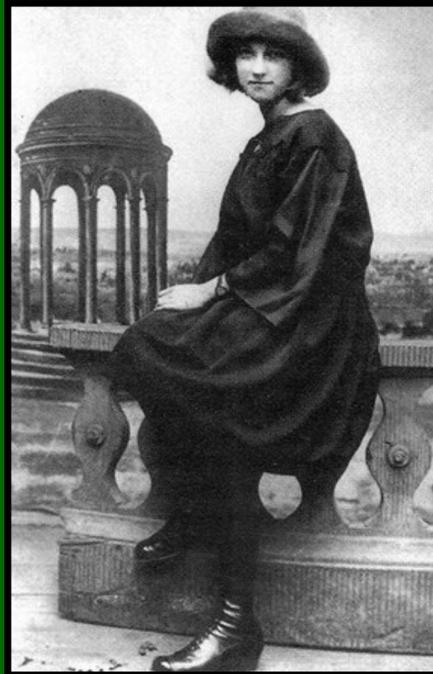
○ 悲劇の磔刑では、オランス型のキリストは点だけの目と口しかなく、その下の聖母マリアは神の子の乳首に向けた「歯のある膺」で長槍を威嚇する。これら先例のない磔刑図像はイーゼンハイムの祭壇画の鮮烈なイメージと、友人の文学者ジョルジュ・バタイユが説く古代ミトラ教の牡牛の残忍な供犠とが融合され、人間存在の不条理劇に昇華された。キリストとマリアのみ白黒であるのは7年後の《ゲルニカ》を予感させる。

⑥-4・(1925~1945年・44歳~64歳)「座る水浴者」「鏡の前の少女」

不安と緊張の1930年代の幕開け



座る水浴者1930年49歳



鏡の前の少女1932年51歳

新たな愛人を装飾性豊かに描く

○ 女性の肉体は、骨と流木で組み立てた不気味なオブジェに変貌し、亡霊のようだ。ヘンリー・ムーアの彫刻に先駆けて内部を空洞化し、実体は不在である。丸い目、とがった鼻、万力のような口をもつかまきり型の頭部は威嚇的なもので、妻オルガがモデルだとすれば、夫婦関係は完全に破綻しているだろう。かまきりは交尾の最中、雌が雄を喰い殺す生態からシュルレアリストの間では注目されていた。

○ 1930年前半、ピカソは夢や眠り、鏡といったテーマを取り込みレアリスト・ピカソの限界を超えようとしたのだろうか。ここでは少女、いや成熟した女性が楕円形の鏡の前に立ち、手を差しのべてもうひとりの自分（同じではない）＝他者を抱こうとしている。少女は新たな愛人マリー＝テレーズだ（当時23歳）。正面と側面の、太陽と月を思わせる異視点構成の顔はその乳房や子宮と同様に、鏡像において一層幽艶なイメージに変容している。

⑥-5・(1925~1945年・44歳~64歳)「ミノタウロマキア」

ゲルニカを予見するピカソ版画の傑作



○ **ミノタウロマキア1935年54歳**・・・ギリシア神話に登場する牛頭人身の怪物ミノタウロスと闘牛技を意味する**タウロマキア**を合わせた造語である。1935年に制作されたこのエッチングは迫りくる惨劇を予見するものと解釈されている。半裸の女性闘牛士やロウソクの火を掲げ持つ少女に襲いかかるかのように見えるミノタウロスは、単に暴力や獣性を表しているのではない。隆々たる筋肉と堂々たる角をもちながら、まるで盲目であるかのように手探りで歩を進めるのだ。画面左の、キリストを彷彿とさせる髭の男も梯子を登ろうとしているのか降りてきているのか判然としない。こうした曖昧さは、神話や宗教の単純な図解に陥ることなく見るものに自由な解釈の余地を与え、という効果をあげている。

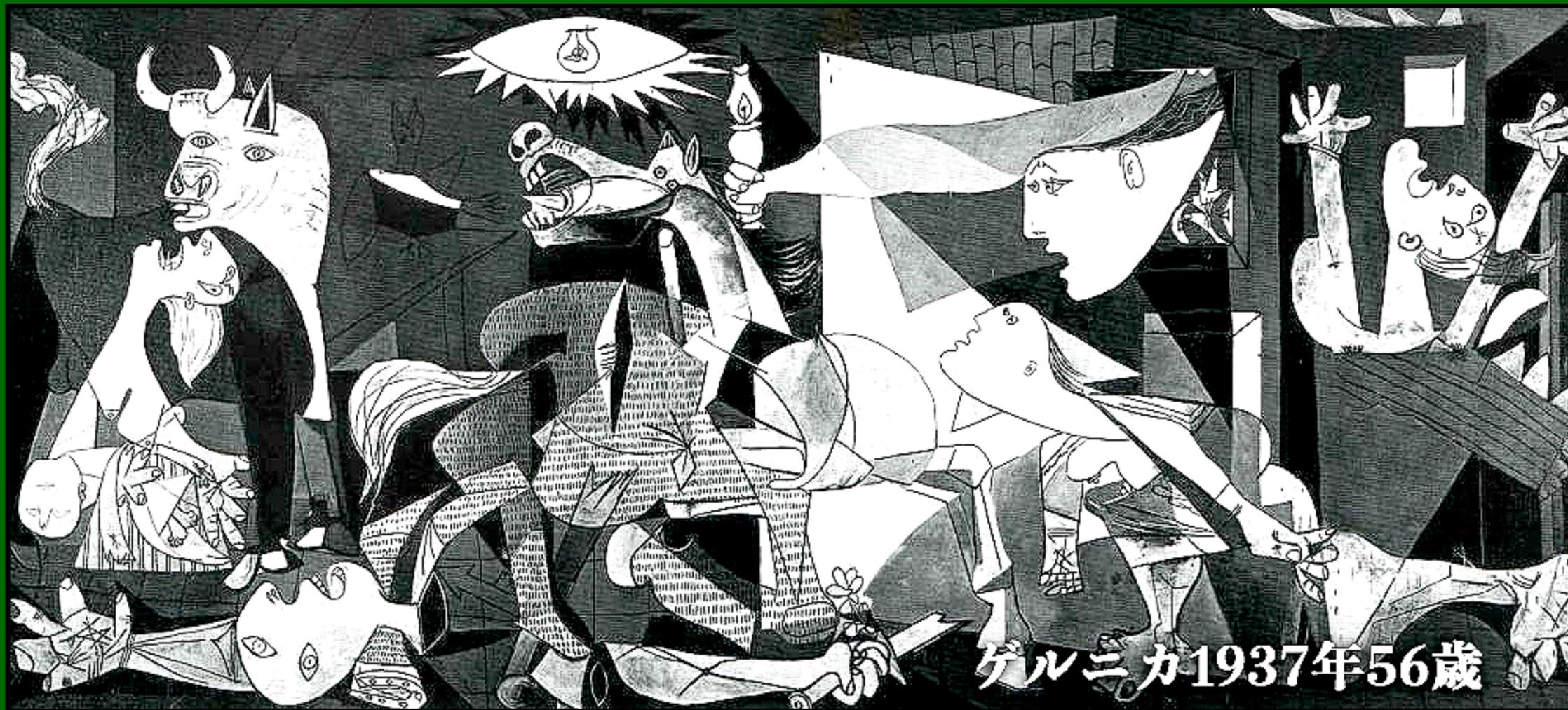


スペインの歴史に根ざした生と死のドラマ

○ **繰り返し描き続けた主題**・・・ピカソは**1933年52歳**、34年53歳と2年続けて夏のヴァカンスをスペインで過ごす。最後となった祖国への旅行を機に**闘牛の主題が頻繁に描かれるようになる**。晩年を過ごした南仏でもアルルやニーム、フレッシュに出かけ闘牛観戦に興じ、闘牛士ルイス・ミゲル・ドミンギンと親交を結んだだけでなく、華やかな見世物として油彩や素描、版画や陶器と様々な表現方法で闘牛を描き続けた。

## ⑥-6・(1925~1945年・44歳~64歳)「戦争と平和への挑戦」

### ピカソ後期時代の絵画「戦争と平和への挑戦」



○ 牡牛は牡牛、馬は馬だ。鑑賞者は結局、見たいように見ればいいのだ。・・・ピカソの言葉

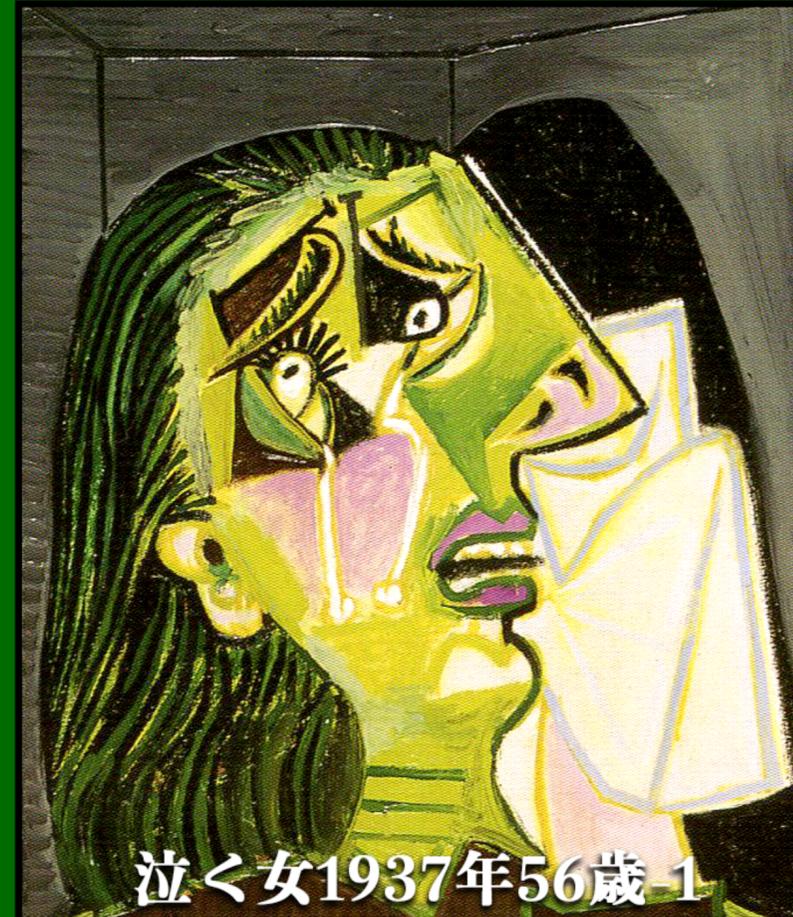
○ **ゲルニカ・1937年56歳**・・・パリ万博のスペイン共和国パビリオンの一階に設置された、縦3.5m、横7.8mの大作で、《アヴィニヨンの娘たち》と並ぶピカソの代表作。この年の4月26日に起こったスペイン北部バスク地方の小都市**ゲルニカ**に対する**無差別爆撃**がその主題になっている。この事件は当時、**ファシズムの残酷さを象徴するもの**として、**国際的に激しい批判の対象**となっていた。ピカソは画面のなかから爆撃を示唆する具体的なモチーフを排除し、悲嘆や苦痛に身をよじる**人物や動物が折り重なる寓意画**として作品を構成した。各々のモチーフ、とくに**牡牛や馬の象徴性**については**多くの解釈が**生み出されてきたが、**様々な解釈を許容する多義性こそがこの作品の特徴**であり、何もひとつひとつのモチーフに特定の意味を与える必要はない。

# ⑥-7・(1925~1945年・44歳~64歳)「泣く女のバリエーション」

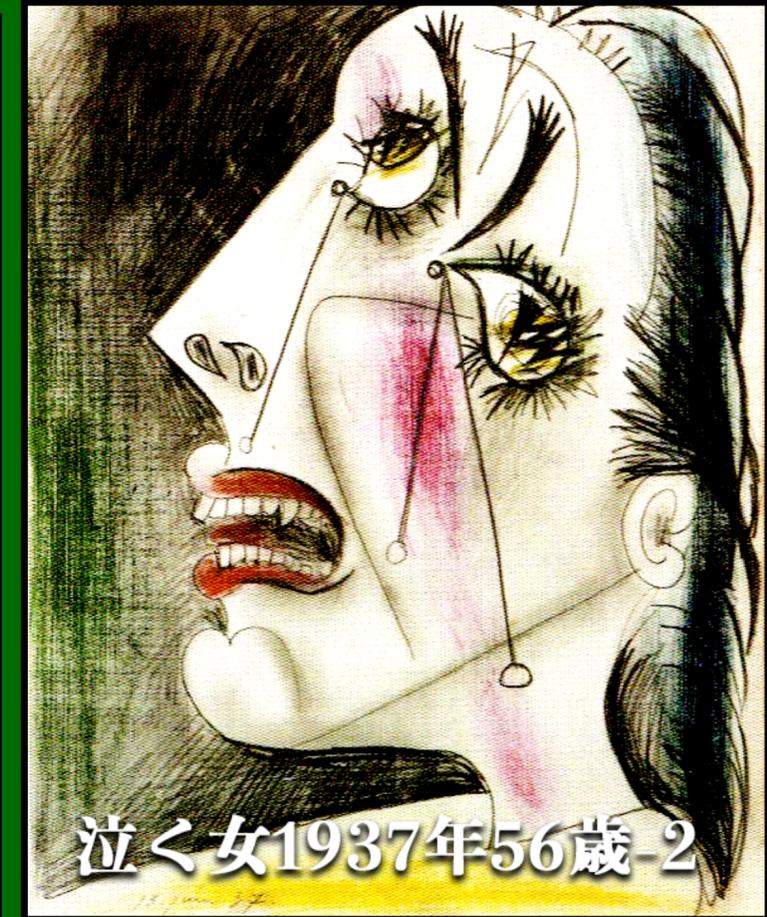
激しい色彩とデフォルメで表現される悲しみと怒り・(ドラマール)



泣く女1937年56歳



泣く女1937年56歳-1



泣く女1937年56歳-2

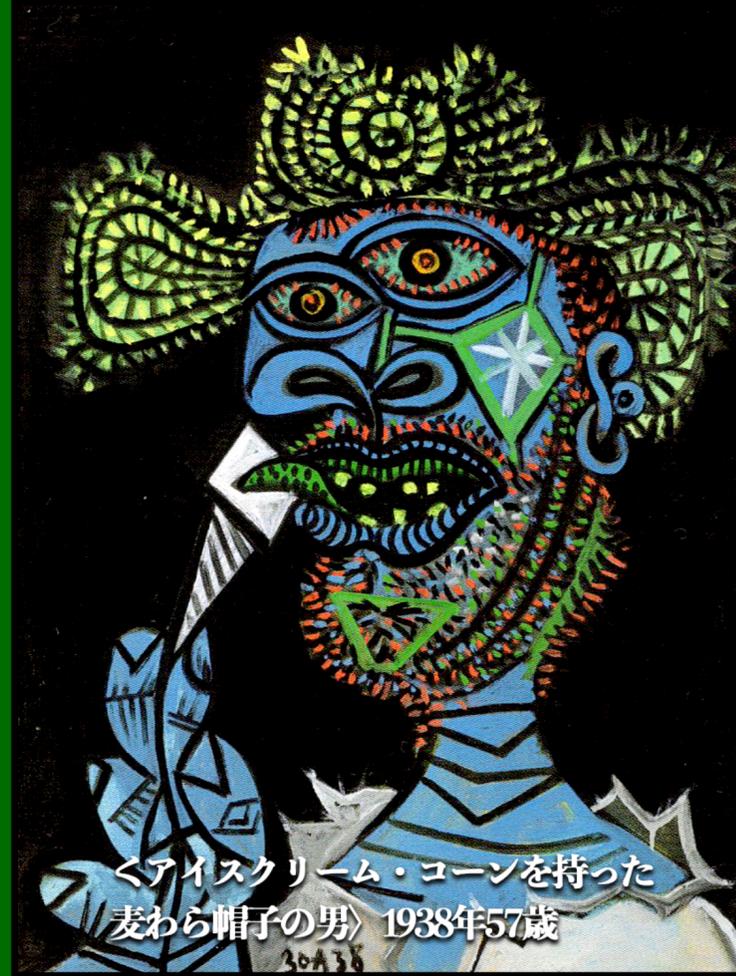
○泣く女1937年56歳・・・数多くの連作が生まれた末、10月に完成したのが暖色系の色彩を多用した極彩色の本作品だ。ここでは、造形上のコントラストから生じる緊張感とともに、ファシズムの脅威が現実のものとなり、第二次世界大戦へ向かっていく重苦しい社会的雰囲気、あるいはピカソの私生活における葛藤や苦悩を読み取ることができよう。この作品は完成後すぐにペンローズに売却され、1938年に《ゲルニカ》がイギリス各地を巡回した際は、壁画と一緒に展示された。1987年、相続税の代わりにイギリス内国歳入庁へ物納され、テート・モダンの所蔵品となる。

⑥-8・(1925~1945年・44歳~64歳)「第二次世界大戦前後のピカソ」



納骨堂1944~45年63~64歳

戦争そのものは描かない



くアイスクリーム・コーンを持った  
麦わら帽子の男 1938年57歳

Picasso, The Charnel House, Paris, 1944-1945, 1945



小鳥をくわえる猫1939年58歳

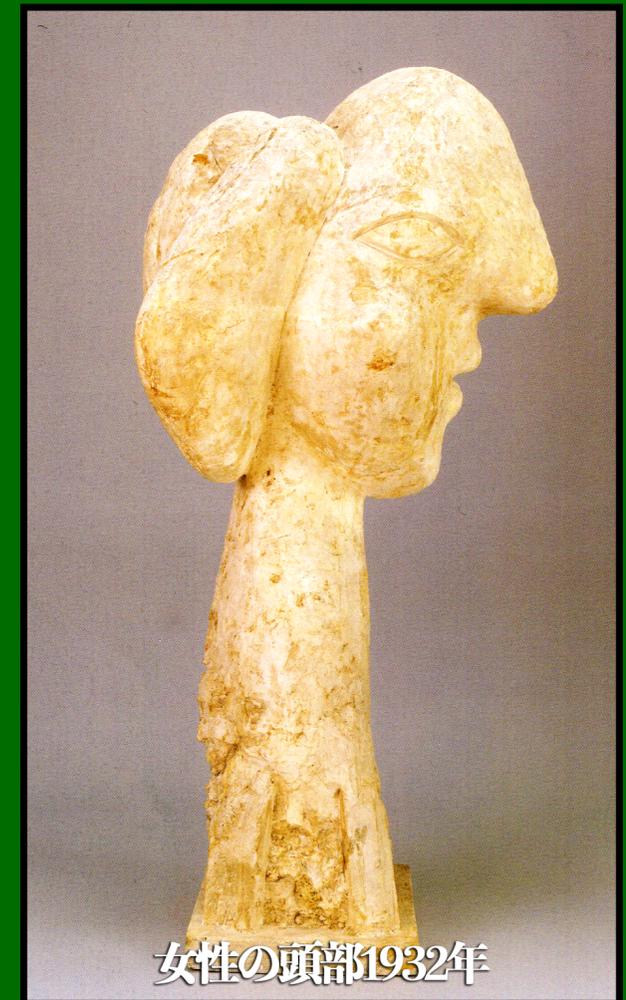
○ **納骨堂1944~45年63~64歳**・・・特に悲劇的、空虚であるのは《納骨堂》だろう。それは強制収容所のガス室に送られたユダヤ人家族の姿である。若い頃からの親友マックス・ジャコブも1944年5月、**強制収容所で非業の死を遂げた**。画面全体にガス煙のような気配がただようなか、うつ伏せの男(父)は生けにえの仔羊(犠牲のキリスト)のように縛られた両手を高く掲げ、逆向きの女(母)は乳房をさらしてその上に重なる。息絶えた両親の下で、残された幼児が母の流す血を両手で受け止める。《ゲルニカ》と同様、モノクロームの無慈悲な空間。「**悲しみのないどういピエタ、哀悼者のいない埋葬、飾りのないレクイエム**」。

○ 1944年8月25日、パリはドイツ軍の占領から解放され、翌1945年5月7日にドイツ、8月14日には日本が無条件降伏して第二次世界大戦は終わった。この10年近い戦争の時代、ピカソはどのように暮らし、制作していたのだろうか。ここに掲げた3点の作品で明らかのように、陽気で快活なテーマや気分はどこにも見られない。しかし、ピカソは芸術家の信条として戦争そのものを描こうとしなかった。**陰鬱な表情と醜く歪曲された人間、小鳥を喰らう残忍な猫、真紅の鶏冠(とさか)の雄鶏、牡牛の頭蓋や弱々しい光の蠟燭が置かれた、ヴァニタス画を連想させるアトリエ、逆に平和を象徴する鳩や羊を抱える男**などで、その意味では**すべて戦争の寓意画**である。

## ⑥-9・(1925~1945年・44歳~64歳)「ピカソの彫刻」

### 変幻自在な素材と形態

### ピカソのオブ ジェ・彫刻



○分析的キュビズムの時代まっただなかに制作された《ギター》1912年31歳、キュビズムが三次元を二次元に還元するだけの運動ではなく、二次元と三次元が等価なものとして扱われるものだったことを示している。硬い素材を彫る彫刻なのか、柔らかい素材を盛りあげる塑像なのかという、彫刻の伝統的な概念はまるで通用しない。ピカソの関心は「彫刻を制作」することよりも、素材を自由に組み合わせて、立体を構成することにあった。

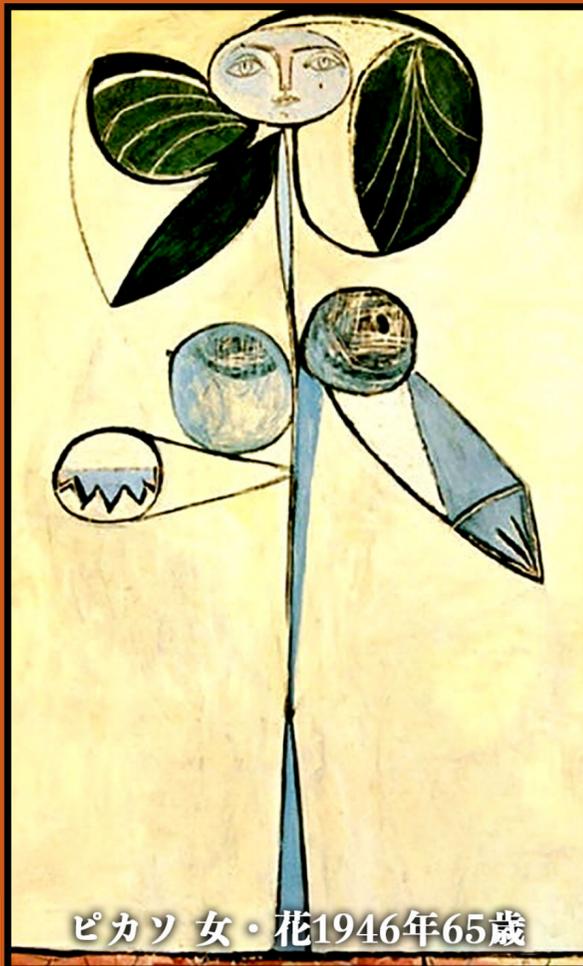
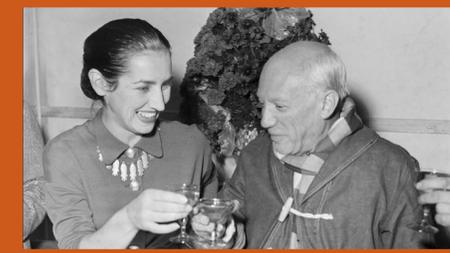
○首の長い《女性の頭部》1931~32年50~52歳・・・ボアジェルーのアトリエで制作された。ピカソが約20年ぶりに手がけた塑像で、マリー＝テレーズをモデルとする。そのブロンズ像は1937年のパリ万博、スペイン共和国パビリオンの入口階段脇に設置された。戦後の彫刻はさらに自由度を増し、《羊を抱く男》のような古典的な作品があるかと思うと、自転車のハンドルとサドルを組み合わせた《牡牛の頭部》や、自動車のおもちゃを頭部に使った《猿の親子》のような遊び心に満ちた作品もある。

●ピカソとこの時代の出来事

- 1946年 65歳 ◆ フランソワーズ・ジローと同居
- 1947年 66歳 ◆ 息子クロードが生まれる
- 1949年 68歳 ◆ 娘パロマ誕生
- 1950年 69歳 ◆ 朝鮮戦争勃発
- 1952年 71歳 ◆ ヴァロリスの礼拝堂に《戦争と平和》を制作
- 1953年 72歳 ◆ ジャクリーヌ・ロックと知り合う  
フランソワーズ・ジローと別居
- 1954年 73歳 ◆ ドラン、マティス死去
- 1955年 74歳 ◆ 妻オルガ死去  
カンヌの「ラ・カリフォルニー」荘  
を購入し、ジャクリーヌと同居
- 1961年 80歳 ◆ ヴァロリスでジャクリーヌ・ロック  
と結婚
- 1963年 82歳 ◆ バルセロナにピカソ美術館が  
開館する
- 1968年 87歳 ◆ 親友で秘書のサバルテスが  
死去。追悼の意を含め《ラス・  
メニーナス》連作をバルセロナ  
のピカソ美術館に寄贈
- 1973年 91歳 ◆ 4月8日、カンヌ近郊のムージャンにて死去。ヴォーヴナルグ城の敷地内に埋葬される

⑦-1・(1946~1973年・65歳~91歳)「成熟する晩年」

美貌と知性を兼ね備えた若き伴侶(フランソワーズ)を得て、新たな環境で創作に没頭した戦後の時代



ピカソ 女・花1946年65歳

○ 《生きる喜び (アンテイボリス)》 1946年65歳・・・大戦の末期に知り合ったフランソワーズ・ジロー (同棲1946~54年)、続いてジャクリーヌ・ロック (1955年のオルガの死後、61年に正式に結婚) が老画家を支えた。戦後の10年近く、すなわちフランソワーズとの時代は、子どもたちと地中海に遊び、ヴァロリスでは陶芸を楽しむ穏やかな一時代であった。とくに《生きる喜び (アンテイボリス)》には解放と自由、平和への喜びがあふれている

○ 《女=花》 1946年65歳・・・ピカソを魅了したフランソワーズの美しさと知性、快活さが見事に表されている。

## ⑦-2・(1946~1973年・65歳~91歳)「朝鮮の虐殺」

同時代の残虐行為を普遍的なメッセージに



○ピカソは1950年に勃発した朝鮮戦争を、感情をもたないロボットのような容顔で無慈悲に銃を構える軍隊が、裸体で無抵抗な女性を銃殺する場面として描きあげた。被害者となる女性はみな母親なのだろう。なかには妊婦も含まれている。女性たちの足元で泥遊びに興じる幼い子どもの姿が、場面の非人間性をさらに際立たせている。当時、ピカソが共産党に入党していたことを考慮に入れるならば、右側の軍隊は北朝鮮領に侵攻したアメリカ軍を表象していることになるはずだ。ピカソは北朝鮮側に立ち、アメリカ軍の非道を告発する明確なメッセージを発している。

○ゴヤ《5月3日》1808年5月2日・・・スペインに侵攻してきたフランス軍に対してマドリード市民が蜂起し、翌3日には一般市民の処刑が行われた。<5月2日>と<5月3日>の対作品は、このスペイン史上の大事件を描いたゴヤ(1746-1828)の代表作である。ピカソの《朝鮮の虐殺》はマネの《マクシミリアンの処刑》(1868年)やこのゴヤ作品を下敷きにして

## ⑦-3・(1946~1973年・65歳~91歳)「朝鮮の虐殺」



○ 1950年六月に始まった朝鮮戦争には、アメリカ軍が介入し、はては細菌作戦まで行なった。ピカソはそれに抗議して「朝鮮の虐殺」を描き、ついで細菌作戦をも告発した「戦争と平和」を描く。この壁画は二枚の画から成り、それぞれ5m×10m、合わせて百平方メートルという広大さである。

## ⑦-4・(1946~1973年・65歳~91歳)「国連に託された警鐘」



○ 岡本太郎によれば、ある作品に感動するということは、形式上の影響を受けるとか、模倣したりすることでもなく、むしろ”それに挑戦し、正反対のものを突き出すことによって、本質をつかみとる”ことであるという。他と自を同時発見することで、”共感すればするほど、個性は燃え上がってくる。”その後ピカソはあまりにも巨人になり過ぎた。何をやってもピカソだから、と許されるほど、神格化した。それはまるで、”天国という牢獄に閉じ込められた”ような状態だった。この「**イカロスの墜落**」は、まさにそんな**ピカソ自身の墜落の暗示**、**ピカソ晩年の人間的な絶望感**がそこにはあるのではないかと、岡本太郎は云っている。1958年制作(77歳)

⑦-5・(1946~1973年・65歳~91歳)「国連に託された警鐘」

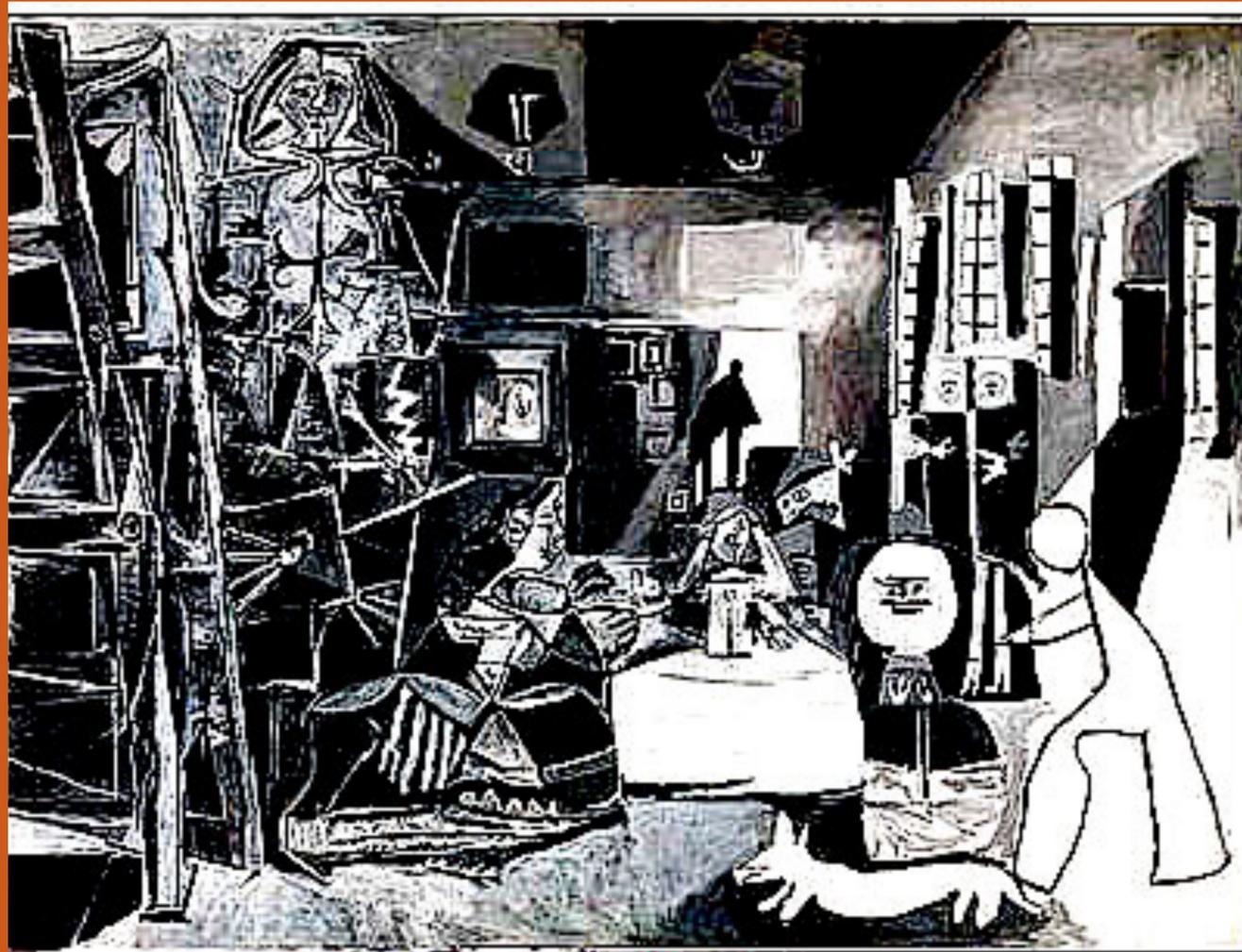


ピカソ美術館



○ **戦争と平和の制作1951年71歳**・・・「戦争」と「平和」という二つの対になる作品と「世界の4つの部分」の3枚で1セットの作品です。フランスのヴァロリスにある、ピカソ美術館内の礼拝堂の壁面とアーチ状に曲面を描く天井の全面を使用して描かれています。向かって左側が「戦争」、右側が「平和」、中央（奥）が「世界の4つの部分」です。

## ⑦-6・(1946~1973年・65歳~91歳)「ラス・メニーナス」



ピカソ ラスメニーナス (女官達) 1957 (76歳)



ベラスケス作のラスメニーナス 1656



「ラス・メニーナス (女官たち)」  
ベラスケス 1656年頃



バルセロナのピカソ美術館

○1957年、ピカソは「**絵画の神学大全**」とさえ呼ばれたベラスケスの代表作《**ラス・メニーナス**》を題材として58点もの連作を描いた。印象派の画家たちが称賛したベラスケスの絶妙な空気遠近法や色彩はピカソ作品からは姿を消し、その代わりに大胆な変奏が展開していく。ピカソはこの連作が散逸してしまうことを嫌い、ずっと手元に置いていた。1968年、サバルテスの死をきっかけに、バルセロナのピカソ美術館にまとめて寄贈された。

○バロックの巨匠ベラスケス(1599~1660年)の代表作である《**ラス・メニーナス**》は王の執務室に飾られた、王家の集団肖像画であり、1656年に描かれた。この作品の通称は、王女マルガリータの両側に仕える侍女(メニーナ)に由来する。

⑦-8・(1946~1973年・65歳~91歳)「ジャックリーヌ」



picaoica92歳の自画像



「接吻」1969年(88歳)・油彩・ピカソ美術館 (



(陰の声：ヨボヨボ爺さんになったピカソ君をよく介護しつつ実権を握ったね。ピカソ死後の莫大でややこしい相続問題はジャックリーヌさんが采配を振るって解決したそうです)

ジャックリーヌさんは料理や家事もよくし、スペイン語も堪能で友人の芸術家達とも楽しい会話が出来た嫁

# ⑦-9・(1946~1973年・65歳~91歳)「ピカソの陶芸」



フクロウ・コンドル1949年68歳



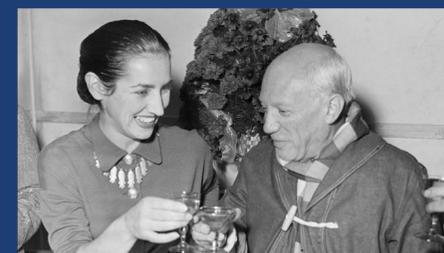
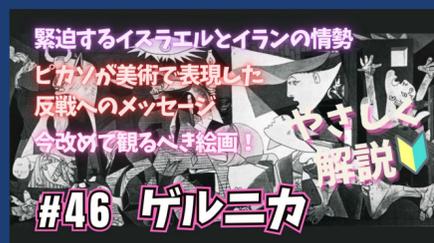
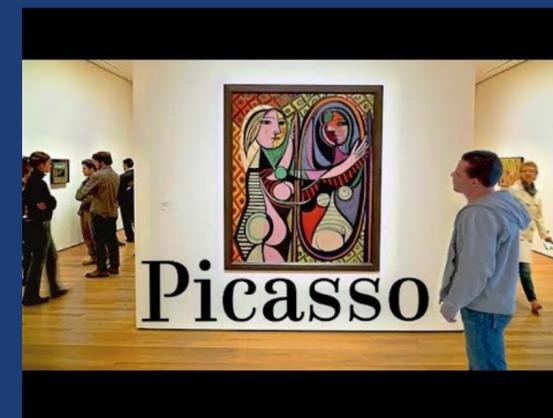
皿1949年68歳

○粘土にかけられた錬金術・・・ピカソが陶芸に親しむようになるのは第2次世界大戦以降のことであった。1946年、ピカソはフランス南部のヴァロリスで製陶業を営むラミエ夫妻と知り合う。彼らが経営するマドゥラ工房でピカソは陶芸の面白さに開眼した。そして、粘土で小さな人形を作ったあと、すぐに陶器の絵付けにとりかかる。皿の平面はカンヴァスとして利用され、ありふれた陶器が芸術作品へ変貌する錬金術が施されたのだ。当然のことながら、ピカソは与えられた皿や壺に彩色を施すだけでは満足しない。新たな素材と戯れるピカソは自ら粘土をこね、花瓶が女性像に、壺が鳥にというふうに、陶器に次々と命を吹き込んでいった

バルセロナのピカソ美術館



# YOUTUBE



**ご参加いただきありがとうございます。**

**○ 今日のテーマ**

**「人間の画家・ピカソは、戦中・戦後の戦争の愚かさを直視し、どのように表現したのか。#02」 (後半)**

**○ ご感想などありましたらお願いします。**

- ・ ピカソの全般をつうじてはどうでしたか。**
- ・ 今後ともよろしくお願いします。**